

第 38 回静岡リハビリテーション懇話会抄録

演者：川村 直子（女）

所属：聖隷三方原病院 リハビリテーション部

職種：作業療法士

研究発表者：川村直子

演題名：術後乳がん患者に対する当院での取り組み・課題

<コメント>

【はじめに】

当院では、1年前より乳がんの手術を受けられた患者様に対し、術後翌日より作業療法士によるリハビリテーション(以下リハビリ)を行っている。きっかけは乳がん術後のリンパ浮腫外来患者が増加したためである。

リンパ浮腫とは、リンパ管に障害があるためにリンパ管の能力が低下することにより、皮下組織内に組織間液が溜まった状態をいう。

発症し症状が進んでしまうと治療に時間がかかり、身体的・精神的苦痛が伴う。また、治療をおこなう専門機関が少ないのも現状である。乳がん手術を受けられた方はだれでも術側上肢に発症する可能性があるが、外来患者はリンパ浮腫についての知識がない方が多かった。そこで、リハビリでどんな介入ができるか考えた結果、早期からの情報提供が大切ではないかと感じ、リンパ浮腫の予防と早期発見を目的にリハビリ介入を開始した。

【介入までの経過】

まずは検討会議を開き、リハビリ Dr・外科 Dr・リハビリスタッフで、現状の把握と介入方法を検討した。次に、乳がんやリンパ浮腫について文献の検索や勉強会の参加により、知識・技術向上を図った。その後、病棟ナースと話し合いの場を設け、リハビリ介入以前から患者に配布されていた冊子を確認、修正を行なった。

また、乳がん術後患者のリハビリ介入ということで、年齢層も考え、羞恥心や安心感などの精神面に配慮し、スタッフは女性限定とする事に決め、介入を開始した。

【介入方法】

手術前日に、顔合わせと術前評価のため病棟へ訪問し冊子を配布。術後のリハビリの進め方や内容の説明を中心に機能評価をおこなった。

冊子の内容は、改定前は、運動障害を改善するための体操、退院後の生活について、リマンマ外来について書かれ、リンパ浮腫に関しての記載はほとんどなく、ほぼ説明なく渡されていた。これをリハビリスタッフが中心となり確認し改定版を作成した。改訂版には、内容修正と共に、リンパ浮腫について、リンパ浮腫のためのマッサージ方法、日常生活上の留意点を追加した。また、冊子の表紙からは乳がん患者とわからない工夫がされ、専門用語を使用せず患者がわかりやすいよう絵を載せた。

手術翌日より早期リハビリを開始、機能改善のプログラムと共に、患者の話を聞きながら冊子を見て口頭での説明を加えた。特に、リンパ郭清した方はリンパ浮腫の潜在期に入ってしまうことや、リンパ浮腫の症状や早期対処方法を指導した。

【経過】

患者から『リンパ浮腫について何もわからないから聞けてよかった』『この冊子はいつでも見られるようなところに置いておく』などの声を聞くことが出来た。

しかし、『これからの治療が不安』『髪の毛が抜けるって聞いたけど・ウ・ち』『専用の下着はどんなものがあるの?』など、不安な声も聞かれた。

結果より、患者の反応からリハビリ介入は良かったのではないかと思われた。しかし、患者の多くはさまざまな不安を抱えていることもわかった。このことから、術後早期から、患者の訴えを聞きながらリマンマやリンパ浮腫について情報提供すること、リンパ浮腫や日常生活上の留意点などの知識を適切に伝えることは、重要であることを再確認することができた。また、毎日関わり話を聞きながらそれらについて指導や説明を繰り返すことで、患者の不安感を軽減させるメンタルケアも出来ていたのではないかと感じている。また、個人担当制や女性スタッフの介入により、より話がしやすかったと考えられる。毎日同じ担当者が数十分関わり話を聞くことができるのはリハビリの特性と思われ、リハビリスタッフが介入する意義はあると感じた。

【今後の課題】

こうした介入の中で、リハビリ介入後の病棟ナースとの関わりは冊子を作成した時のみであった。しかし、他部門との情報交換も重要と考える。

そこで現在、他部門とリハビリの進行状況の共有化を図るため、乳がんパスとリハビリ経過を連動させる計画中である。

また、術後乳がん患者支援チームが病棟ナース中心に発足、リマンマやリンパ浮腫などの情報提供、精神面のフォローをおこなうため、Dr、Ns、リハビリスタッフ、臨床心理士などが集まり今後活動していく予定である。そのチームの中でリハビリスタッフとしてどう関わっていくか、今後の大きな課題となると思われる。

パスと連動させ、患者がより円滑に治療がすすめられるよう、担当スタッフと協力していきたい。そのためには、より適切な情報提供ができるよう、乳がんやリンパ浮腫について、さらなる知識と技術の獲得が必要と思われる。